

チェルノブイリ通信

2010年9月20日

No.81

■発行 NPO法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク
〒811-3102 福岡県古賀市駅東2-6-26パステル館203号
TEL/FAX 092-944-3841 Email jimmu@cher9.to
ホームページ <http://www.cher9.to/>
■募金口座 郵便振替口座 01770-1-65328
e-バンク ジャズ支店(支店番号201)(普)7017104



チェルノブイリ医療支援ネットワークは、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、
現地から求められる医療支援を行います。
この活動を通して、日本とベラルーシの人々の心と心のつながりを深めます。



リュドミラ・ウクラインカさんの娘アンナちゃん。5歳の誕生日を迎えた。

特集：ベラルーシ調査団帰国報告

これまでの支援について検証
いまなお続くチェルノブイリと甲状腺ガン

団体設立20年に寄せて(2)

今さら聞けないチェルノブイリQ&A

事務局日誌より主な活動報告

インターンがやってきた!

会員さん紹介コーナー

ヘアサロン・スネガビークのご案内

募金者のお名前とメッセージ

●特集● これまでの被災者支援を検証

いまなお続く チエルノブイリと甲状腺ガン

今年5月16日～25日、スタッフと医療通訳・コーディネーターの2名で、ベラルーシ共和国を訪問。甲状腺ガンやチエルノブイリ支援をめぐる現状について、関係者よりヒアリング調査を行った。

チエルノブイリ医療支援ネットワーク(以下CMN)では、1997年からブレスト州を中心として、年に1～2度の移動検診団派遣を行い、診断技術向上と甲状腺ガン専門家の人材育成につなげてきた。

しかしチエルノブイリ原発事故から24年が過ぎ、現地の社会状況も大きく変わりつつある。
会員の皆さんからのご寄付によって活動するCMNにとって、皆さんの善意を活かし、最大限の成果へつなげることは、団体の最も大切なミッション(使命)である。支援は本当地の被災者の役立っているのか、現地のニーズは何かを明らかに

し、今後さらに効果的な支援活動へつなげていきたいと考え、10日間の限られた日程の中で、現地パートナーであるベラルーシ赤十字、医学再教育センター内分泌室(10番病院)、ミンスク悪性腫瘍センター、ブレスト州立内分泌診療所と国際赤十字移動検診チーム(CHARRP)、現地NGOの福祉工房「のぞみ21」(ゴメリ市)、「コンフィデンス」(ミンスク市)、日本大使館へのヒアリングを行った。

今回は、主に医療関係者から伺った話を中心に、皆さまへご報告したい。(寺嶋)



上右／幾度となく訪れたブレスト要塞。
上左／どこまでも続くベラルーシの広大な大地。
下／医学再教育センターにてラリサ教授と面会。写真手前は医療通訳の山田英雄さん。

ラリサ・ダニローバ医学再教育センター教授に聞く



◆ガンは減ってはいない

「吸引穿刺^{せんし}など確かに充実してきていますが、3月にゴメリに行き診察した際にも、患者がやはり多いと改めて感じました。より早期診断を充実すべきだと思います」

医学再教育センターのラリサ・ダニローバ教授は、草創期からの現地パートナーであり、現在取り組み移動検診プロジェクトのフォロワーアッパーを担当している。

「ガンは今も見つかり、減っていません。甲状腺機能低下症が増えていますが、その理由はまだ分からず、専門家として原因を追究しているところです。外国でも50代の間で増えているのですが、ベラルーシではそれよりも若い世代に増えています」

医療設備の現状については、「日本から届いた日立エコーは、吸引穿刺に非常に役立っています。全体で見ると一概には言えませんが、設備が備わっていたり、設備は備わっていても使える人がいなかったり。かつてより医療

機材や設備が充実したとは言え、依然として高価なことは変わりません。ここは中央病院なので設備は充実していますが、全国的に見ると、設備の充実はまだまだ」と話す。

◆今後必要なのは現場の医師育成

海外からの支援もゼロではない。ごく最近では海外から半年間、検査試薬の物資支援があり、汚染地であるゴメリ州、プレスト州を中心に配布した。

検査試薬は消耗品だが高価で、国内で手に入りにくいものの一つ。今回の海外支援は貴重だが、ラリサ教授によれば、現地としてはスポット的、単発的なものよりも、できるだけ安定した関係の下で継続的にパートナーと連携し、患者支援に取り組みたいと話す。現在、政府レベルでの大きなチェルノブイリ支援プロジェクトはなく、ラリサ教授はCMNによる継続的支援に大きな信頼を寄せている。

「患者に密接した活動である移動検診の充実が、ガン患者の早期発見につながっています」

政府予算にも限界があり、若手の専門家が海外の最新技術に触れることのできる機会も少ない。清水医師による甲状腺内視鏡手術に対しても、若い医師たちの関心が高いと言う。

◆早期発見・診断の更なる拡充を

新たな課題もある。「現在、甲状腺ガンと合わせて乳ガンにも取り組んでいます。甲状腺ガン、乳ガン、糖尿病は今ベラルーシで一番重要なテーマです」

ラリサ教授は現在、甲状腺機能低下症の研究プロジェクトを計画している。専門家チームで患者と手術した後の患者の動向を調べ、ゴメリ州とピンスク（プレスト州）の比較も行っているという。

現在、ベラルーシ国内で唯一効果的に働いているのがプレスト州と断言している。

「チェルノブイリ被曝による甲状腺ガン患者は、各地に散らばっています。人々がガンで命を落とすのを防ぐには、早期発見・診断システムの拡充が必要です。予算的な問題はありますが、他地域でもプレストをモデルにして、取組みを広げようとしています。例えば、現場で吸引穿刺をして、2回目を日本からの訪問に合わせて実施する。診断情報を受け取ったり送ったり、アドバイス面でのサポートも必要だと思います。特に最前線で甲状腺の臨床に当たっている医師と、取り出した細胞をガンかどうか診断する細胞診の医師の技術向上が重要です」

取材を終えて。

CMNスタッフ
寺嶋 悠

必要性を感じながら、派遣費や日程の難しさからなかなか実現できなかったプロジェクト評価と現状調査。今回、医療関係者のインタビュアーから感じられたのは、甲状腺ガンをめぐる支援への現地ニーズは、まだまだ強いという印象である。一定の成果を上げた甲状腺ガン検診に関して、ともしれば「やり尽くしたのではないか」という気持ちも持っていたが、関係者から一様に口を揃えて聞かえて来たのは「まだ終わっていない」「次のステップへ」という声だった。新たな課題、残された課題についての気付きも多くあった。点から線へ、線から面へ。今回のヒアリング結果を具体的に活かし、今後も誠実に被災者の命と向き合いながら、会員の皆さんと共に被災地を支え続けたい。



ミンスクの街並み

ビクトール・カルヴァノフ ベラルーシ赤十字総裁に聞く

◆チェルノブイリ支援の現状

ベラルーシ政府機関には、「チェルノブイリ非常事態省」と「保健省」があり、連携してチェルノブイリ関連の事業が行われている。

民間レベルでのチェルノブイリ支援団体について、ベラルーシ赤十字や関係者にヒアリングをしたところ、チェルノブイリ支援NGOはそれほど多くない印象を受けた。ベラルーシの社会



情勢もあり、日本のようにさまざまなNGO、市民グループが活動している状況とは異なる。現在、政府認可や公的な組織、NGOがチェルノブイリ支援を行っているほか、いくつかの小さなグループが個々に活動しているが、事故から時間が経過すると共に、徐々に活動は沈静化しつつある。長崎大学と医学再教育センターの連携など学術的な連携や、日本やドイツ、スイスなどヨーロッパのNGO、市民グループ、教会団体などと草の根レベルでの連携、協力も行われているようである。最近ベラルーシ赤十字へは、アイルランドから短期間の支援を受けたと言

う。カルヴァノフ総裁によると、半年間の支援は検診車の運転手の給料、消耗品購入などに充て、国際赤十字の移動検診チームにも支援を届けたが、短期間なので支援で物資を購入してしまえば終わりで、継続性のある取組みが必要と話す。

カルヴァノフ総裁によれば、「チェルノブイリ関連の政府予算は、当初よりも減りつつありますが、汚染地に住み続けることが問題で、住民の検診、生活保障が必要ですが、生活保障につ

いてはわが国で行うべきもので海外には支援を求めません。事故処理に当たった被曝労働者（リグビダートル）に対しては、政府から年金、医療保障、生活支援が100%支援されています。リグビダートルの認定を受けるには基準があるものの、認定を受けさえすれば、国は手厚い福祉を行っており不満はないと思います」と言う。

◆現場移動検診チームの『黄金の働き』

ベラルーシ国内で最も広く効果的に動いているチェルノブイリ関連プロジェクトは、国際赤十字連盟によるゴメリ州、ブレスト州、モギリョフ州の3つの汚染州での移動検診プロジェクトである。これは1997年から始まったもので、立ち上げの際には東京で専門家研修が行われるなど、日本赤十字との関係も深い。CMNの移動検診も、ブレスト州のCHARPと連携することで、質の高い支援、検診に取り組みことができている。

この移動検診チームの活躍に、カルヴァノフ総裁は高い評価を置いている。「大きな病院のある中心都市まで30キロぐらいの距離に住む住民なら、自分たちで診察を受けに行きます。しかし、それより離れていると、病院に行くことが難しくなる。赤十字では自分で検診を受けに行きづらい、都市から30キロ以上離れた地域を中心に移動検

診をしています。3州の日常の医療活動をぜひ一度ご覧いただきたい。現場の医師は給料以上のすばらしい働きをしています。彼らの働きには黄金に値する価値があると私は思います」

◆移動検診の強化と乳ガンが課題

現在の課題は「若年層への検診強化と、女性の乳ガン。現在マンモグラフィや医療機器の支援を要請しているところで、汚染州3州に乳ガンの早期発見・診断を取り入れられたらと思っています。私が思うに、周辺の移動検診の強化が最優先で、赤十字の協力を仰いで、市民団体もぜひ支援をしてほしい」と話す。日本も含め、世界中で急増している乳ガンが、ベラルーシでも課題となりつつある。

「そして一番の問題は、放射能恐怖症と、逆に放射能を恐れない人が増えていくということ。チェルノブイリのことを、人々は正直忘れつつあります。日本の赤十字や市民団体が支援を続けてくれていることに感謝しています。それは、日本の国民は放射能の被害を伝聞で知っているからではなく、実際に被爆を体験しているからではないでしょうか」

総裁はインタビューの最後をそう結んだ。

アルツール・グリゴロビツチ医師・ブレスト州立内分泌診療所長、CHARRPスタッフに聞く

◆減らない甲状腺ガン

現在ブレスト州立内分泌診療所長であるアルツール医師はCHARRPの中心メンバーであり、CMNによる検診にも当初から関わってきた。

「国際赤十字による移動検診は、1ヶ月のうち21日は州内の地方を回って検診をしています。3週間地方を回り、1週間休むというパターンで、都市から離れた農村で、甲状腺と糖尿病、内分泌系疾患の検診をしています。エコーを見ながら、ガンの疑いのある細胞を取り出す(吸引穿刺)という、日本から学んだやり方が診断に役立っています」

「昨年是一年で約一万六〇〇〇人を検診し、うち四五〇〇人に吸引穿刺を実施。うち四九〇〇人にガンが見つかったので、三二六人に一人の割合でガンが見つかったという。日本と比較しても非常に高い割合である。」

「事故後、甲状腺ガンは減っていません。子供の甲状腺ガンは少し減ったが、一般的な水準に比べたらまだ高い。成人の甲状腺ガンも高くなっています」



◆検診の現場では

現在CHARRPの構成は、エコー専門医師2名、内分泌科医師、登録(カルテ)担当、看護師(検査技師)、運転手各1名ずつの6人で州内を回っている。

「年間計画を立ててブレスト全州の16地区(ラヨン)を順番に回っています。1地区の人口は、一万九〇〇〇人、八万四〇〇〇人です。検診では、事故当時0〜18歳で被曝した『リスクグループ』に留意し、中心的に検診しています。女性、50歳以上にガンが多いのは世界的兆候で、この世代にも気を付けています」

「患者に多いのは、自己免疫性甲状腺炎と甲状腺結節です。以前と比べて、地方性甲状腺腫は減ってきています。自己免疫性甲状腺炎が増えているのが気になっています。前ガン症(ガンの前段階)として現れる病気)として出てくる病気が多くなっています。またチェルノブイリ被災者は血圧が高い

傾向があります。被曝による高血圧ではなく、避難や生活環境の変化、仕事や健康への不安、ストレスなどが一番大きな原因だと思います」

◆技術向上と現在の限界

日本との協力により、地方の検診現場からすぐに診断結果を首都ミンスクの基幹病院へ伝えられるようになった。ミンスク側も、ブレストの技術向上を認め、診断結果に信頼を置いてくれるようになった。それでも、限られたスタッフでの検診には限界がある。

「各地の患者は、3〜4年に一回受診します。甲状腺の病気には自覚症状がなく、潜在的に進展してくるので多くの患者は気付きません。中には酷い状況になって検診を受ける人もいて、19%が手遅れという厳しい現状です」

私たちの訪問前日までの3週間、CHARRPのウラジミール医師は、ブレスト市から一五〇キロ離れたベロオジョルスカ地区で検診を行っていた。「この地区での検診は、2003年、2007年、そして今回で3回目です。間隔が長く、中には異常を感じたまま7年くらい放っていたという患者もいました。限られた現在の専門医だけでは、患者が多く、診ることができない現状です」

◆最前線の医師育成と医療設備の充実

それでも、検診を続けつつ、現場の医師育成を急ぐしかない。

「吸引穿刺ができる人と、細胞診ができる人が必要です。州内の都市などから人を呼んだり、シンポジウム等で、医師を教育することは大事で、次の計画の一つになると思います」

「目下の課題として、医師を育てることと、新たなエコーの必要性があります。今のCHARRPでは1997年に赤十字からもらった機材を使っています。しかし休みなく13年間働き続け、老朽化が問題です。CMNの支援で届いたエコー、顕微鏡は非常に性能が良く、ここで多くの患者の命を救っています。消耗品や試薬、さまざまな症例を解説する電子アトラス、吸引穿刺用の機材、自動ギムザ染色装置、内視鏡など、医療現場の備品や設備もまだまだ不足していると痛感しています」

最前線で被災者の命を見つめる一人として、CMNの支援者の皆さんへの感謝は言い尽くせないと言います。

「日本の医師によるエコーと吸引穿刺を見て、私たちもやりたいと希望を持ち、皆さんからの支援を得てエコーが届き、その後の活動につながりました。患者の早期診断を支えて下さっている会員の皆さんに、心から感謝の気持ちをお伝えしたいです」

今年6月28日、チェルノブイリ医療支援ネットワーク(旧：チェルノブイリ支援運動・九州)は設立20周年を迎えました。前号に続き、今号では1998年以降の活動についてご紹介します。

写真で迎える活動20年

1999年1月

団体設立10周年企画
「チェルノブイリからの報告」を開催



当時日本での職を辞し、ベラルーシの首都ミンスクの国立甲状腺ガンセンターで医療活動に従事されていた菅谷昭医師と、大学で医療心理学を専攻し、被災地の子どもたちの心のケアに取り組んでいたリュドミラ・ウクラインカさんを日本に招き、講演会が九州各地で行われました。

1998年11月

リュドミラ・チュプチュクさん来日



支援運動・九州の設立10周年のプレ企画として、ベラルーシ共和国ゴメリ州グルシュコビッチ村のリュドミラ・チュプチュクさんが再び来日。北九州市、下関市など計5か所で講演会、交流会が行われました。

2001年4月

原発事故から15年、活動報告会を開催



ベラルーシよりリュドミラ・ウクラインカさん、福祉工房「のぞみ21」のナターシャさん、故ステパンさん、スタッフのエレーナさんを日本へ招き、全国11か所で講演会や交流会を開催し、被災地の現状を伝えました。

事務所を遠賀郡水巻町へ移転



2000年7月

2000年9月

活動10年史
「チェルノブイリとともに」を発行

結成から10年を機に、これまでの活動を振り返る活動10年史が編集、発行されました。

86年に起きたチェルノブイリ原発事故やその影響、そしてこれまで迎ってきた活動について詳しく紹介されています。



2002年12月

ブレスト市での検診がスタート

1997年にブレスト州ストーリーリン地区でスタートした甲状腺ガン検診プロジェクト。計9回の検診が行われ、2002年より拠点をブレスト州ブレスト市に移し、新たな検診プロジェクトが始動しました。



雪だるま2号購入のための資金調達に東奔西走した時期。募金集めのためにキャンペーンを展開し、街頭にも立ちました。たくさんの方々の出合いやつながりを得るとともに、世間でのチェルノブイリに対する関心の薄れを感じました。事故から二十年を境にその傾向はますます強まっているように思いますが、私たちはこれからも変わらずベラルーシと日本の人々をつなぎ続けていきたいです。(ミキ)

2004年5月
チャリティヘアサロン・スネガビーク



一人の美容師さんの「自分の技術を活かした国際協力がしたい」という思いからスタートしたチャリティ美容室。気軽に参加できるチェルノブイリ支援のひとつとして、多くの方から好評を得ています。

2003年
検診車「雪だるま2号」購入キャンペーン



1997年に寄贈した移動検診車「雪だるま号」の劣化に直面し、新たに「雪だるま2号」を現地へ届けよう!というキャンペーンが展開されました。街頭募金や映画『アレクセイと泉』上映会など、色々な活動がなされました。

2006年4月
ベラルーシで国際会議



原発事故から20年目となる2006年、最大の被災国となったベラルーシにて国際会議「事故から20年～被災地の復興と持続可能な発展のための戦略～」が開催され、NGO円卓会議にて、ブレストでの甲状腺ガン検診プロジェクトについて報告を行いました。

2005年8月
検診車「雪だるま2号」を贈呈



およそ1年にわたる免税手続きを経て、30万キロの走行の末に廃車となった「雪だるま号」に代わり、2代目となる「雪だるま2号」がベラルーシ赤十字に贈呈されました。現在も「雪だるま2号」はベラルーシの大地を元気に走り回っています。

2009年10月
ベラルーシで初の甲状腺内視鏡手術



ブレスト州立病院にて、清水一雄医師(日本医科大学)による甲状腺内視鏡手術が行われました。詳しくは「チェルノブイリ通信」79号で報告しています。

2007年1月24日
福岡県にNPO法人の設立申請を行い、無事に認証を受けました。九州の有志の思いから始まって全国へと広がってきた支援の輪を、今後さらに広げていきたい、多くの方々のご支援とご協力を呼びかけたいという気持ちを込め、団体名を「チェルノブイリ医療支援ネットワーク」と改めて、再スタートを切りました。

事務所を古賀市へ移転

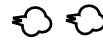


2008年7月





皆さまからお寄せいただいた



メッセージをご紹介します！

спасибо!

チェルノブイリが私の中で遠くなりつつある
1996年、転勤先の熊本で活動を知りました。汚染された豊かな大地、祖国を離れず暮らす人々、映像は衝撃的でした。忘れてはいけないと強く思いました。
「チェルノブイリ」を忘れないために、ささやかな支援を続けていくつもりです。
現場の方々、本当にありがとうございます。

田中菜穂子さん(神奈川県)

спасибо!

設立20周年、おめでとうございます！
このような素晴らしいNPOが、日本にあることを誇りに思います。
相手の立場に立った支援活動をされていることは、本当に素晴らしいことだと思いました。
少しでも、多くの人の命を助けるために、今後も頑張ってください。応援しています！

P.N: エッグさん

спасибо!

日本の皆さんとの最初の出会いは、1997年の研修でした。
特に現場でエコーと吸引穿刺を見て、私たちがやりたいと希望を持ちました。
それに対して、チェルノブイリ医療支援ネットワーク(CMN)のサポートを得て、必要なエコーを贈ってもらったことは大きなプラスになりました。エコーガイド下の吸引穿刺は、早期診断の有力な武器になりました。
CMNの支援で移動検診も続けることができます。患者の早期診断のサポートをしてくれたCMNを支える会員の皆さんに、心から感謝します。私たちのプロジェクトは継続し、よく機能しています。皆さんのおかげで専門家の育成もできています。プロジェクトを計画している中で、次の展開もいろんな方面で話しています。特に、より最新の医療機器を使った診断、治療を念頭におかなければいけません。
CMNを通じて、会員の皆さんが私たちの目的のためにサポートしてくれたことに感謝しています。

アルツール・グリゴロビッチ医師
(プレスト州立内分分泌診療所所長)



(“спасибо”はロシア語で「ありがとう」という意味です。)

特設ページを作成!

団体ウェブサイト、設立20周年を記念した特設ページを作成しました。会報でもご紹介したこれまでの活動や、皆さまからいただいたメッセージなどを掲載しています。インターネットをご利用される方はぜひご覧ください。

→ <http://www.cher9.to/20th.html>

募集しています!

引き続き、設立20年に寄せてのメッセージを募集します。活動に対するコメントや現地へのメッセージなど、何でも構いません。字数は100~150字程度で、お名前の掲載について、[本名/ペンネーム/匿名希望]のいずれかをお書き添えください。

ファックス、ハガキ、郵便振替用紙のメッセージ欄をご利用いただくか、または団体ウェブサイト内の設立20周年特設ページにある「メッセージ送信フォーム」をご利用のうえ、どしどしお寄せください!

いまさら人にはきけない?! 意外と知らない 4月6日事故のからだへの影響は? チェルノブイリ

夏休みは広島のおじいちゃんのところに行ったの

平和記念公園に行ったら色とりどりの折りヅルがとーってもきれいだったよ



あつートリだ!

平和を祈るツルかしら? それとも平和の象徴のハト?

コウノトリの コウちゃんです よろしく

……つてやっぱり コウちゃんか

ベラルーシから よく(かって)遊びにくるんだ

それは きつと、平和を祈る気持ちから こもってるから キレイなんだよ

広島のおじいちゃん 原爆の直後から 身体が 弱くなったつて 言ったのよ

放射能は、 あらゆる病気を 引き起こすからね

でも、病気が 放射能の影響だつて 証明するのつて とつても難しいん だつて……



チェルノブイリの 場合もそうよ

ソ連政府やIAEA (国際原子力機関) は、 体調不良を訴える人 たちに、「気のせいだ」 つて思い込ませよう としての

放射能の被害 ではなく、『放射能恐怖症』 だ、つて

なにそれ! なんて?

ソ連の政府は、たくさんのお金をなかった

一方IAEAは、原発 事故の被害をできるだけ 小さく見せたかった



そんなわけで、 「事故による身体への 影響はない」つて 調査報告をしたのよ



でも、病気の 人たちは目に 見えてどんどん 増えてたんだから、 人々がだまってる わけないわよね

WHOは

1993年

ベラルーシの 甲状腺ガンは 7年間で24倍 に増えた。

原因が原発 事故である ことは明らか である

と発表……

ついに、事故から10年後、 IAEAも放射能が 小児甲状腺ガン 激増の原因と 認めざるをえなく なったの



でも、認めたのは 小児甲状腺ガンだけ だったんだね

事故後20年の ときには『高線量 被曝した事故処理 作業者の白血病』 つつても認められた みたいだけど

それ以外は いまだに認められて ないのよ……



ところで、 小児甲状腺ガンつて? ぼくも子どもだから ちよつと気になる なあ

では、それはまた次回……



事務局日誌より 主な活動報告



日々の活動の様子は、HPの「事務局スタッフブログ」でも紹介しています。
<http://www.cher9.to/>

◆5月29日 参加型評価セミナー



福岡市で開催されたJICA九州主催の「参加型評価セミナーin福岡」に参加。「参加型評価って何？」という講義や、グループワークで実際に2回の演習を行い、2度目の演習では実際の団体の活動を取り上げて評価を行いました。くわしくは事務局ブログでも報告しています。

演習のようす

◆7月18日～8月1日
チエルノブイリ写真展



展示風景

福岡市のアクロス福岡にある、(財)福岡県国際交流センター「こくさいひろば」にてチエルノブイリ写真展を開催。被災地のようすや国内外での活動写真、ベラルーシの民族衣装、民芸品、子どもたちの絵画などを展示しました。期間中は多くの方に展示品を見ていただきました。展示の様子は事務局ブログでも報告しています。

◆7月24日 「ぞっけっしゃ」コンサートにて物販



3月に続き、福岡市南区で開催された記念音楽会「朗読「月光の夏」&合唱構成「ぞっけっしゃがやってきた」」にて、支援コーヒー・紅茶、「のぞみ21」雑貨、チエルノブイリ関連書籍の販売しました。商品購入の他、基金をして下さる方もいらっしゃいました。ありがとうございます！

ブース前にて

◆7月24日 古賀市商店街土曜夜市に出店



にぎやかでした

事務所を置く古賀市の、JR古賀駅前商店街で開催された土曜夜市にてブースを出店。低価格のものを中心に、「のぞみ21」雑貨を販売しました。やはりお祭りだけあって、食べ物やおもちゃなどが人気で、それほど売行きはありませんでした。が「支援につながるのなら」と雑貨を購入して下さる方もいらっしゃいました。

◆7月31日 エコまつりinじゃがいも村



暑い中、雑貨を販売中

環境啓発団体「地球のめぐみ」主催で、福岡県粕屋郡新宮町の「じゃがいも村」にて開催されたエコまつりに参加。ブースを出店し、「のぞみ21」雑貨を販売した他、チエルノブイリ原発事故や現地での活動についての発表もさせていただきました。おいしい料理やお菓子もあり、お腹いっぱいイベントでした。

レポート

インターンシップ生インタビュー。

福岡教育大学教育学部 共生社会教育課程
国際共生教育コース3年
小野 むつ美

福教大からインターンに来られた小野さんによる研修レポート第1弾です。

8月16日から10日間インターン生として、チエルノブイリ医療支援ネットワーク(CMN)でお世話になりました。私にとってこの10日間は自分自身のNGOに対する関心をより深め、もっとNGOの現場に関わり、働きたいと強く確信させてくれる貴重な日々でした。

私がNGOで働きたいと思ったきっかけは、3年生になってようやく就職について考え始め悩んでいた頃、ちょうど授業で出会った福岡のNGOの資料でした。

詳しく調べてみると、福岡の中にも様々なNGOがあり、それぞれが強い理念をもって活動している事を知りました。これだ！こんな風に自分も強い理念を持って活動する仕事がしたい！と思った私は、早速福岡にあるNGOのまとめ役の(特活)NGO福岡ネットワーク(FUNN)を教授に紹介していただき、FUNNでボランティアを始めました。そしてその中で、特に積極的に活動されているCMNに興味を持ち、NGOの実際に働く現場を知りたいと思って今回インターンをさせて頂きました。

実際に働いてみて感じたことは、仕事の種類の多さです。報告書の作成や、記事の編集、イベントの準備など、他にも様々な仕事がありました。また、今回特にやらせていただいた広報作業はパソコンが不可欠で、パソコンが苦手な私はだいぶ時間がかかってしまいました。これを機会にパソコン作業をスムーズにするための努力をしようと思えました。

(☆次号へつづく)



広報作業に取り組む小野さん

私も応援しています!

会員さん 紹介コーナー

Vol.9

このコーナーでは、チェルノブイリをともに支えられている会員の皆さまより、活動への思いや現地へのメッセージをお聞かせいただきます。

取材/三島

本日の会員さん

井上充昭さん

&

いのうえしんぢさん

<福岡市城南区>



おちゃめなポーズをきめる
充昭さん(左)としんぢさん(右)

今年の「ヘアサロン・スネガビーク2010」は10月11日(月・祝)に開催します。詳しくは12Pの案内をご覧ください。ご予約をお待ちしています!
(「スネガビーク」はベラルーシ語で「雪だるま」、「雪の精」という意味です。)

対するメッセージをお願いします。

(兄)：今後もスネガビークを続けていきたいと思ってるので一緒にがんばっていきましょ!! 関係者の方々もいろいろ大変だと思いますが、がんばってください!

(弟)：チェルノブイリ原発事故が年月と共に薄れていつているのと、原発が地球温暖化の方策として拡がっている現状に焦りを感じ「もつとチェルの活動を広げなきゃ」と思いつつ、うまく新機軸がたてられてませんが、僕は頼りになりませんけど、みんなで協力すればなんとかなるかも?色々やっていきましょう。

●では最後に、今年のスネガビーク開催にむけて一言お願いします!

(弟)：兄貴が当日困るくらいにガッツリ予約を集めようと思えます!(笑)

(兄)：皆様もいろいろお忙しいと思いますが、もし今度のスネガビークに来れそうな方はぜひご参加ください!お待ちしております!

は何でしょうか?

(兄)：やはりカットすることで世の中の人のためになるチャリティーになつてることではないでしょうか!?あとは手伝ってくれる仲間たちが一所懸命やってくれるのでお客様から、「チャリティーなのに、こんなに丁寧なやつてくれるの?」って言われることではないでしょうか!?感謝ですね!

(弟)：僕は身内のスタッフになつてるので「自分の魅力とは?」と聞かれてはいるようなんです(笑)。あえて言うなら「髪を切る」という日常生活に身近なことが題材になつてから、なんだか一般的には縁遠い存在になりがちな国際協力のイベントであっても、敷居が低くて親しみやすいんじゃないかな。

国際協力が身近になる…なんて風なことをチラシでも書いておきながら、本当はどこに居てもどんな生活を送つても、誰でも世界の一部なんですけどね。この世界で生きる人は誰だつて100%孤立している人なんていません。これを読んでるあなたが今抱えている哀しみや喜びだつて、いつだつて社会的なものですから。

●チェルノブイリ医療支援ネットワークの活動に

今回の「会員さん」にご登場いただいたのは、毎年恒例のチャリティーイベント「ヘアサロン・スネガビーク」(以下、スネガビーク)の発案者である美容師の井上充昭さん(兄)、そしてイラストレーターで、チラシやポスターのデザインをしていただいている、いのうえしんぢさん(弟)のご兄弟です。
(※スネガビークの誕生話やお二人の紹介については、「チェルノブイリ通信」60号、72号にも掲載しています。)

●スネガビークは今年で7回目の開催を迎えます。これまでの苦労話や心に残っている出来事について教えてください。

(弟)：まず企画をたてた当初、会場がみつからずにはばらく長い間凍結してましたが、大村美容専門学校さんに協力してもらったことで急展開したのは嬉しかったですね。

すべてはそういう、色んな人とのつながりで出来上がってるんじゃないかなとも思います。というのも、今回の広報チラシやポスターカードに登場した撮影モデルのIさんは、数年前のスネガビークのお客様でした。そうしたつながりのおかげで、いろいろ出来るのも楽しいですね。

(兄)：今までもたくさんのお客様に来ていただいたのですが、せっかく来ていただいたのにもかかわらず、予約がいっぱいでお断りしてしまったり、予約時間をオーバーしてかなりお待ちいただいたりしてるのが大変申し訳なく思っています。

ただ毎年来てもらつてるお客様が喜んでもらっていることが、僕らにとって嬉しいことですね!!

●毎年、老若男女を問わず、たくさんの方に会場にいらしています。ずばり、スネガビークの魅力

たくさんのご支援を ありがとうございます。

(順不同 敬称略)

浅原望樹 飯田洋美 石川睦枝 石橋啓子 磯本真澄 板井
順子 稲吉清子 岩川靖子・新良 岩森久美 上野恵子 英空
寺 江口淳子 江藤俊一 NPO法人じゃがいものおうち 榎
本みつ枝 大谷正藤 大庭きみ子 大庭由美子 岡田薫 甲斐
純子 金谷昭美 亀井廣子 神田香織 グリーンコープ生活協
同組合おおいた 桑田陽子 桑原千鶴子 古賀教子 古賀千種
小島典子 (財)福岡YWCA 佐藤恵美子 佐藤久美 里見
照子 澤田和子 沢野和子 芝山祥子 島田美恵子 菅原滋
子 関根敏子 高木節子 高藤富美子 高村久 高柳俊哉
高山幸子 田嶽薫 竹内サキ子 武田ひとみ 田代トヨミ 田
中香代子 鶴田光子 遠矢秀三 (特活)広河隆一非核平和写
真展開催を支援する会 徳光清孝 中嶋寛 中島美代子 仲
宗根明美 長野淑子 長棟かおる 中村順子 中村幸枝 柳
楽翼 成迫秀美 南條由美子 日本医科大学内分科外科 箱
田裕司 早川もと子 檜田正浩 引田良子 日高太 廣橋富
士枝 深堀ミチ子 福教組浮羽三井支部 藤井道子 藤崎智
子 ぼこあぼこ 堀苑美代子 松尾博文 松木幸美 真鍋恵子
実取久美子 三宅哲子 宮田成男 村上和代 村山敬子
めぐみ保育園職員一同 森岡美佐子 森澤恵子 森下須美子
安永美紀 保内内科クリニック理事長 保元徳宏 山本和子
山本京子 山本裕子 (有)マインド・ネットワーク 横井生子
横川律子 吉井紀子 吉田久美子 吉村淳子 吉元京子 米
田知代 渡辺絹子 渡辺久美子 渡邊幸之新

〔都道府県別〕
【東京都】6名 【神奈川県】2名 【埼玉県】1名 【長野県】1
名 【三重県】2名 【兵庫県】2名 【鳥取県】1名 【島根県】
6名 【岡山県】3名 【広島県】3名 【山口県】4名 【愛媛
県】1名 【福岡県】47名 【佐賀県】1名 【長崎県】3名 【熊
本県】6名 【大分県】8名 【宮崎県】2名 【鹿児島県】5名

●マンスリーサポーターの皆さん
相川靖 相羽美香子 麻生絹代 石本祥一郎 磯道綾子 一瀬
和美 稲田照子 岩口香織 上田英子 植田清子 内野千鶴
子 延壽富美 大麻卓子 大久保伸子 大崎知恵 大中百合
大場満 片岡八重子 金山涼子 紙森優子 河上雅夫
崎清美 川尻愛子 木村雅子 古賀輝洋 後藤宇企子 財津
悠子 齊藤美代子 坂口馨子 櫻井美恵子 佐竹早苗 佐藤一
江 佐藤進一 佐藤照子 清水悦子 白浜千恵子 鈴木弘子

合計	1,492,704円
活動支援金のぞみ21カンパ	1,414,704円
雪だるま3号カンパ	53,000円
のぞみ21カンパ	25,000円

首藤展子 高山知佐子 竹田恵子 武田孝子 田中京子 珍部
千鳥 土持秀男・由利子・朱加 綱脇牧子 坪川裕子 富永隆史
友景忍 鳥原良子 永江之助 永尾ゆかり 永野沙智子 中
村洋子 榎崎悦子 西井えりな 丹羽道代 納富育代 廣松初
美 福井初子 藤本孝子 洲田三輝 前田靖子 松尾智恵子
松永庸子 水本敬子 三野桂子 村田聡子 村西美由紀 室屋
芳乃 森川キミエ 山下澄子 山中陽子 山本亮輔 吉田美抄子
LIFE&ART青空・東海林由紀 渡邊真志子
計91名(匿名含む)

(2010年5月1日〜7月31日までに募金をして下さった方、な
らびに「ぞみ21」雑貨、チエルノブイリ支援コーヒー・紅茶の購入
を通じて活動を支援して下さいました方です。通信にお名前を紹介する
ことを許可いただいた方のみ掲載しています。)

皆さまからのメッセージ(一部抜粋)

●きびしい中での活動、お疲れ様です。わずかですが、お役
にたてればと思います。●皆さま、お身体大切にがんばって
下さいませ。●ブルサールはやめてほしい。もちろん原発
もです。あきらめてはいけません。●娘と同じ年、24年目だ
すね。がんばって下さい。●いつもおいしいコーヒーをいた
だき嬉しいです。●心ばかりですが…。●もんじゅ又使って
大丈夫なのかなあ…。中1の娘の一言です。子どもたちの感
覚の方が正しい気がしています。何かの役に立てて下さい。
●開封するとコーヒーのいい香り。そしてカタログではわ
からなかったきれいな色合いのランチョンマットとブックカ
バーにうれしくなりました。●「ぞみ21」の位置を地図で
探しました。同情や心情でない私のチエルノブイリを探りた
いと考えています。有難うございました。●日本では原発増
設の動きが…。原発がエゴですって!!皆がもう少し辛抱す
ればいいのです!!政府には頑張ってもらわないと。●かわい
いマトリョーシカのキーホルダーを渡しながら孫娘たちに
チエルノブイリのことを話します。●原発反対!地球の資
源を大切にしましょう。●私も事故の現実を伝えます。●小
さな笑顔が増えますように。

今年も やります チャリティヘアサロン スネガピーク2010

～あなたのオシャレで国際貢献!～



プロの美容師さんたちに髪を切ってもらうことでオ
シャレに国際協力をしてみませんか?
収益金はチエルノブイリ事故で被災した人々への医
療支援活動にあてられます。
(この事業は「福岡市NPO活動推進補助金」の助成
を受けて実施します。)

- 日時:2010年10月11日(月・祝)10~15時
- 会場:大村美容専門学校オムニスタジオ
(福岡市中央区大名2-1-35-2F)
- 料金:1500円(シャンプー、カット、ブロー)
※パーマ、カラーなどはありません。
- ◆来場者にはオーガニックコーヒーをプレゼント!
- ◆ご予約は先着110名。どうぞお早めに!
- ◆当日の運営ボランティアも募集しています。
事務局までお気軽にお問合せください。

後編 記集

イベントの秋がやってきました。スネガピークの他、福岡
市内で開催される国際協力イベントなどにも参加予定で
す。どうぞ足をお運びください!(み)

チェルノブイリ 医療支援 検索

地球にやさしい再生紙と大豆インクを使用しています。